

## 鶴見俊輔と「外からのまなざし」

Shunsuke TSURUMI — His View from Outside

Tsuneyuki KIMURA

木村 倫 幸

(一)

「空港から町へゆくバスの中から、地平線までひろがる野原を見た。木がまったくない。

岩が多く、その上に苔と低い草がはえ、遠くの丘は青ときいろのんだら模様のパロードのように光っていた。

それは人間が死にたえたあとにひらけてくる風景のようだった。

よくみると、羊がところどころに点のようにうずくまっているので、どこかに人家がかくれているのかも知れないけれども、努力しても私には人間を見つけることができなかった」①

第二次大戦後の日本社会での民主主義を代表する思想家、鶴見俊輔の言葉である。鶴見の思想を考察する場合、その依って立つところが「私的な根」にあること、そして鶴見が、この場所を梶子に平和運動、市民運動への関わりを持つてきたことが指摘されてきた。② また鶴見の視点の貫くところが、日本社会を含む近代社会に対する批判であり、「私的な根」がさらに奥行きを持ったものとして、これを外部から批判するものとなっていることについても、一定程度説明されている。③ この場合鶴見は、とりわけ日本近代社会に受け入れられてきた文明の直線的進歩の観念に対して、相対的複眼的見方を提起する。それはこれまでの近代社会を見返し、未来から現在を見返す視点でもある。

小論はこの鶴見の視点を、『絵葉書の余白に——文化のすきまを旅する』④の諸記述をもとに検討する。時代的に見て過去に属する紀行記ではあるが、現在でもその視点から得られる教訓は新鮮である。むしろ近代化がより効率的に拡大深化している今こそ、その有効性は重みを増していると言えるであろう。

鶴見の近代社会批判がどこに行き着くのかという意味では、前出の文章は象徴的であるが、筆者の推測では、鶴見は、近代社会を、過去・周辺・未来の三方向から乗り越えて批判しているのではないかと考える。とりわけ未来からの批判が、近代文明の滅んだ後、人類の滅んだ後からのものと推察されることは、鶴見の思想の特徴づけの重要な要素となるかもしれない。

鶴見の言う近代社会の本質とこれに抵抗する人びとのあり方を、未来からの見返しという分母に乗せて検討していくのが小論の目的であるが、これを通じ

て、鶴見の近代社会の乗り越え方の一端に迫ることができれば、と考えている。

## (二)

鶴見は前出書において、さまざまな国の印象を通じて近代社会批判を行なうが、ここではそれらのいくつかに焦点を合わせて、スケッチ風に見ていくこととする。その焦点とは、共同体と民主主義のあり方の問題、全体主義や戦争、あるいは圧倒的な権力に対する抵抗の姿勢の問題、ヨーロッパ文明の歴史の問題とその文化を近代以降輸入し続けてきた日本社会の問題等々である。これらの諸問題は、それぞれ微妙に交錯しており、そのいずれもが鶴見の近代社会批判の特徴的な側面をなしている。

そしてここで取り上げられる諸国は、アイスランド、ポーランド、ブルガリア、チエコスロヴァキア(当時)、ウエイルズ、イングランド、スウェーデン、ギリシャ、トルコ、インド等である。これらの国々におけるそれぞれの感想は一見したところまとまりのない印象を与える。しかしそれらを通じてその底に流れる深い洞察が、われわれに近代社会のありかたについての見返りを促していく。

さて小論の冒頭に紹介した文章で始まるアイスランド(九三〇年に共和国として成立。その後、ノルウェー、デンマーク、ナチス・ドイツ等に占領されたが、一九四四年に独立を回復した)について、鶴見は、この国に根づく民主主義の発祥の地、シングヴェリルの平原について、こう述べる。

「レイキャヴィクの東五〇キロほどのところにマルマナギアの巨大な岩山があり、それがねじれてまんなかたがわれて、ひとすじの道が岩に間をとおりぬけている。その道を一キロほど歩いて終わりまでいきつくと、眼下にシングヴェリルの平原がひらける。

この平原が、アイスランド共和国の議会だった。議会はアルシングと呼ばれる、共和国成立と時を同じくして、西暦九三〇年に生まれた。平原には建物など一切のこっていない。毎年、夏が来ると二週間ほど、アイスランド各地から、来られるものはみなここにあつまって、(中略)それぞれが馬にのって、山をこえ、川をわたってやって来て、一年ぶりにお互いにあうのだから、たの

しい空気が夜の野原にあふれていた。馬をつなぐのに、大きな場所が必要だったろう」(二五五)。

「岩の上を歩いていると、案内人が手まねをした。

『ここにたつてごらんさい。ほら、むこうの岩に、自分の声がよくひびくでしょう』

たしかにここは、巨大な岩壁でむかいあつてつくった自然の講堂になっていた。

『ここに、法律の読み役がたつて、下にあつまっている人たちに、アイスランドの国法を朗読してきかせたものです。法律全部を読むのに、三年かかったと言います』

案内人は、岩の上に自分の孫をたたせて、たのしそうにしていた。三年とは、一年に二週間ごとで三年というわけで、アイスランドの法律全部を朗読するのに六週間必要だったということになる」(同)。

このような民主主義の伝統について、われわれは語るべき言葉を持っているか。欧米流の民主主義の主張に対して、鶴見は、こう語る。

「私は米国の学校にかよっていたころ、イギリスの圧制をのがれてアメリカ大陸にわたるメイフラワー号の上で、新しい土地でどうくらすのかのとりきめがつくられた話を米国史の時間にきいた。そのメイフラワー号協定が米国建設の原型となったという。あとになって考えると、ずいぶん乱暴な話だと思う。これからいく土地にはすでに先住民族がいるのだ。その人びとの意見をもとにすることなく、どうして民主的政治の形をとりきめることなどできるのだろうか。私のうけた米国史の教育には、こういう現実無視がつきまといつた。これと対照的に、西暦九三〇年のシングヴェリルでアイスランド人のつくった議会は、この島には先住民族がいなかったのだから、西欧民主主義の理想を、米建国とは比較にならないほどあざやかにあらわしたものと思う」(三五九)。

民主主義を特徴づける場合、そこにどれだけの血と汗が流されたか、ということとは少し異なる、その民族の分母としての民主主義の基盤を西欧民主主義がどれだけ持ち続けているかということが、もう一度問い直されなければならぬであろう。

「アイスランドの社会に西欧民主主義の原型あるいは純粹型があるというのとはすこしちがう。アイスランドはヨーロッパ大国の介入にもかかわらず、アイ

スランドとしての時間の流れを保ち得たし、その故に、欧米式の近代文明の破局のあとに来る文化の形を示唆する力をもっていると私は思う」(三六〇)。

## (三)

右で見た民主主義の基盤についての考察を踏まえて、鶴見は、この民主主義すら吹き飛ばしてしまう全体主義と戦争による圧迫の問題に焦点を当てる。そして圧倒的な権力に対してさえ、なお根強く抵抗し続ける力が存在し、それが先程の民主主義の基盤に通じていることを確認する。

鶴見は、ポーランドのビルケナウ収容所跡地において、こう語る。

「ビルケナウの収容所には、別にものものしい入口はない。入ってゆくとまっすぐに道が伸び、両側に有刺鉄線でへだてられた野原がひらけている。左側には女、右側には男が住まわされていた、そのバラックのいくらかはのこっており、多くはくずれて、なくなっている。

(中略)

ここで殺された四〇〇万人のユダヤ人のひとりひとりのかわりに、四〇〇万の四角い小石がしきつめられており、それが祭壇になっている。そのむこうには記念碑、そのうしろにポーランドの国旗がたっているけれども、鉄道の引きこみ線の終わるところにひらけているひろい石だみは、ほとんど何もないところという感じをあたえる。

ひどいことがなされた。その場所に、空白をおく。

空白によって記念するという流儀は、人間の言葉をここに長々と書きこんでいましめとするという流儀以上に、人の心にうったえる。

(中略)

これほどひろい敷地を、戦後の窮乏のさなかに、他の目的に転用するということなく、今日までのこしたということ、国旗に感謝したいと思った」(三六〇～三六一)。

このような記憶術は、ワルシャワでも見られる、と言う。

「一九四五年一月、首都ワルシャワがソヴィエト・ロシア軍によってドイツ軍からうばいかえされた時、戦前の人口一二〇万人の三分の一がそこにのこっているだけだった。

生きのこった人びとは、目前の廃墟の写真をとり、戦争中の不幸な日々を忘れまいと心にきざみ、そして戦前の古い町並を三年間かけて昔どおりにつくりだす計画をたてた。

今、ワルシャワの一面に昔どおりにたてなおされた古い町には、ワルシャワ歴史博物館となった一軒があり、そこに十世紀以来のこの町の資料とともに戦時の犠牲の記録、戦争終結当時の首都の町並の写真がならべられている。

文部省の入口の左側に、墓標があり、そこに花がおかれている。そこを入って左側に地下室があり、そこはかつてナチス秘密警察の司令室がおかっていた。司令官の部屋、囚人の監房、ごうもんをくわえた部屋がそのままのこっている。

(中略)

思想犯はひとりひとり小さい部屋にとじこめられ、日光からへだてられてここにおかれ、思わぬ時に向こうの都合でひきだされて、昼となく夜となく、ただ一人で占領軍とむきあわされてとりしらべをうけ、ごうもんをうけた。

(中略)

そこを出れば、もう普通の文部省であり、ただの官庁街だ。日本の官僚の誰が、敗戦後の三〇年あまりに、このような仕方、戦前の日本の思想警察を保存することを思いついただろう」(三六四～三六六)。

そしてさらに、このような視点は、テレジン収容所(旧チエコスロヴァキア)で、手づくりの芝居の衣装と子どもたちによって書かれた絵を見た時の感想につながる。

「その収容所の中にかかれた絵がたくさんのこっていた。

こどものかいた絵で、クレヨンや色鉛筆でかいてある。一家が、食卓をかこんで、たのしそうにみんなで食べている絵。収容所では食物が足りなくて、こどもが、自由だったころの夕食を空想してかいたのだろう。

やがて、色鉛筆もクレヨンもなくなったのか、黒一色でかいた絵になる。太陽が照っていて、その下で、棺をこどもたちがかついで行進している絵。ほんとうに収容所であったことだろう」(三八八)。<sup>⑤</sup>

「テレジンのユダヤ人は、そこにあるものを使って、昔のユダヤ人街を再現しようとした。(中略)音楽会があり、歌劇がもよおされた。『カルメン』はとくにすばらしかった。それをしのご成功をおさめたのは、『売られた花嫁』だった。(中略)このことは、芸術について考えさせる。強制収容所のありあわせ

の布をつかって演じる『カルメン』と『売られた花嫁』は、今日のニューヨークのメトロポリタン・オペラ劇場で演じられる豪華な衣装と練習をつんだ楽団と歌手による『カルメン』と『売られた花嫁』にくらべて、まずしいまねごとにはすぎないだろう。しかし、歌手（その多くはシロウト）の意図と聴衆のうけとりかたをとおして見る時、メトロポリタン・オペラ劇場の歌劇以上の芸術としてこの世にあったと言えないだろうか。生をかがやかしいものにするのが芸術であるなら、これが芸術である。にせものがほんものをこえる時が、人間の歴史にはある」（三九二）。

このように鶴見は、全体主義や強制収容所の苛酷な状況下においてさえない存在する、民衆の中に生き続ける基盤・岩床を確認する。そしてこの象徴として、チェコスロヴァキアを離れる空港の売店で見つけたシュヴェイク人形が取り上げられる。

『兵士シュヴェイクの冒険』は、チェコの作家ヤロスラフ・ハシエク（一八八三～一九二三）の代表作であり、シュヴェイクという、とらえどころのない、一見したところ馬鹿なように賢い兵士が主人公である。これについて鶴見は、こう書いている。

「オーストリア・ハンガリー帝国の軍隊にとらわれて戦争にかりだされ、それがいやで逃げまわるチェコの農民兵である。彼は、自分の参加している戦争をまったく無意味だと思い、本気で参加して人殺しをする同僚をにくんだ。彼に命令をくだす上官をバカにし、私物である上等のコニャックをぬすんでのんでは、脱走をくりかえした。彼には学問はないが抑圧するものと抑圧されるものとの区別はわかっていた。（中略）戦争は、国家と国家のたたかいだが、たがいにたたかう国家が実は肩をよせあって、それぞれの国の民衆を殺しているという別の側面をあわせもっている。兵隊シュヴェイクは、それを感じとって、国家の壁の下に穴をほって、国家間を通底する道をさがしとめた。彼には生きる本能の内にもとくかくされている知恵と行動力がある」（三九四～三九六）。

かくして民衆を抑圧する権力は、その力がいかに強大であろうとも、民衆の生きる力を零にすることはできない。ここに民衆のバネのように強靱でしなやかな未来への生命力がある。この意味で「テレジンのこどもの絵とシュヴェイク人形とは、おなじ方向に手をさしのべている」（三九六）。

#### (四)

以上のような鶴見の考察は、民衆の依って立つ基盤・岩床に関して、これを近代以前の遙かな時代にその源を探る。そしてこのことは近代西欧文明はもとより、人間の活動そのものに対する批判的再検討となる。これに関してあげられるのが、イングランドのストーンヘンジである。ストーンヘンジについての印象を通して、鶴見は、自分自身の存在についてと同時に、これまで人間のなしてきた活動の意味について、こう語っている。

「(前略) イギリスというと、鉄道と紡績と山高帽で、得体のしれない巨石文化ではない。だが、市民革命と産業革命の発生の地であるイギリスに、とうてい市民文化につつまこむことのできない遺跡が、これを見よとばかりに、今も野原に巨大な姿をあらわしている」（四〇八）。

「いったい、これらの石が、おかれた時のままここにのこっているのだろうか。四〇〇年前の巨石の神殿は風化し、これらをつくった人びとの思いおよばなかった形になって今あるのではないか。そのことが、これらの巨石の独自の表現力となっているように思える」（同）。

ここから鶴見は、自分自身を貫く生き方を省察する。

「自分がぐずれおちたあとを考えていれて何かを数千年の後につたえることができるか。ピタゴラスの定理の証明のようなものを表現と呼ぶならば、それも言えよう。しかし、自分の作品がぐずれてゆくなりゆきをくりいれて、四〇〇〇年後に対して何かをうったえようとする人はいるだろうか」（同）。

「巨大な石のひとつは、ほとんど人の顔のようになって、おだやかに笑っている。制作後何千年かたつてから、制作者の意図に反して、その石は人の顔になつて笑いだしたのだろう。」

誰にもわからなくなつてゆくようなさまざまの細かい部分がある。仕事とはそういうものだし、そういうものとしておもしろい。

そういうおもしろさを、今日の中に見出してゆく見方を、自分の中につくりたい。ほろびる側面を、自分の今していることに見て、それを光として感じる力をもちたい。ここに生きているということは、そういうことだ」（四〇八～四一〇）。

換言すれば、「ストーンヘンジは、私たちが今つくるものも、やがてこの石とおなじように不可解なものとなるということをお教える。私たちの生きているということが、すべて過ぎさって、死の世界にゆだねられるということだ」(四二一)。

すなわち鶴見はここで、自分自身を含めての人間の存在の問題へと論を進める。そしてこのことは人間存在の見方を根底から見直す視点——それはまた現在主流的なものとなっている西欧近代社会への見直しともなる——を探ることに到る。このことを鶴見は、「理解をこえるものもつ表現力」(四一〇)、「学問の証明の仕方とはちがう表現力」(同)とつながるものとして示唆する。

「それは、私の今を、その認識の総体をもまきこんでしまうよううずまき感だ。存在の胃の中で消化されてしまうおれ。おれたち。その感じを、学問として記し、分析し、説明することはできよう。しかし、そのなりゆきの全体に対して、なにかへんな感じをもつこともできる。自分の存在をすわりのわるいへんなものとして感じるこの感じ方の中に、存在するものとしての私(たち)のリズムがあり、それが私の思想を貫流する(同)。

かくして鶴見は、人間のこれまでの活動を見渡す視点への手がかりを得ることとなる。しかしながらこれが世界観としてどのような方向を目指しているかの議論には、なお余地がある。

「人間のすることは、自分のすることをふくめて、すべてほろびてしまうということ。

実現したもののすべてがほろびて、可能性のわくぐみに回収されてしまい、可能性のわくぐみだけがのこる。それは、論理にすぎず、存在に足場をもたないが、その論理を目で見える形に表現しようとするならば、ストーンヘンジの石のわくぐみのようなものだろう。

その可能性のわくぐみの中から、私たちがふたたび、流れだして、ここにあらわれるかどうかは、わからない。

だが、私(たち)が、なかったとしても、それはそれで、そのことをうけられる他はない」(四一五)。

西欧近代社会に対する根底からの批判を、鶴見はこう語るが、同じ視点から、西欧思想に対する疑問は、次のように出される。

「西欧の哲学史は、完全な覚醒ということをめざし、さめよ、さめよ、もつと

さめよという理想で自分をはげましてきた。だが、完全に目ざめるということは、それほどねうちのあることか。ねむりこんではいけないのか？ ねむりこまない組織は、銀行から国家にいたるまで何らかの非人間性を身につける。ヨーロッパ哲学のめざした完全な覚醒ということにも、第一それが可能かどうか、第二にそれが実現できるかぎりに追求されるとしてその努力にあたっているかが問われてよい」(四四六、四四七)。<sup>⑥</sup>

このように鶴見は、西欧近代社会への批判に際して、その依って立つ視点としての「可能性のわくぐみ」を語る。そしてこれが、前述の基盤・岩床に通じるものであることは言を俟たない。

## (五)

この鶴見の視点は、さらに近代西欧社会を追い続けてきた日本社会のあり方への疑問、批判となる。そしてその視点は、ともすれば直線的平板的のみ歴史や社会を見がちな傾向に対して、さまざまなヒントを与える。

「ヨーロッパを考える時に、日本人は明治以後、ヨーロッパ近代を主に考えてきた。自分たちが亡ぼされないために必要な技術をこうして身につけた。しかし、そのヨーロッパに中世があり、古代があること、さらには、先史時代の遺跡がそこにあることに眼がとどき、それをもとに見る見方が、ひらけてきた。日本にも、先史時代の巨石文化がのこっている。日本とヨーロッパ、そして世界のさまざまな場所での古代の交流は、最小限度の必要から人間の文化をとらえなおす道を見出すいとぐちになり得る。そういう視野をもつには、今はすでにおそすぎ、それは、人類絶滅の前の夢にしかすぎないのかもしれない」(四二二)。

また、松原正毅著『遊牧の世界——トルコ系遊牧民ユルクの民族誌から』(中公新書、一九八三年)に触れて、鶴見は、日本社会とは対照的に見える視点からの考察の有効性を説く。

「松原正毅によれば、日本人の遊牧生活に対する理解はいちじるしく低い。「人類の生活についての視野をひろめ、日本文化の位置づけをはかるために、遊牧生活の内実について視野をふかめる必要があるのではないか。」

土地や家屋や銀行預金や投資という形で個人の財産をきずくことに関心を

もたないという点で、遊牧民は、日本人の普通にもっているくらしの思想から遠くはなれている。

もうひとつは、くらしを律する時間の性質で、家畜のテムポにあわせてくらしのリズムは、今の日本人には想像しにくい。

しかし、日本文化を理解するのに、その対極にある文化の可能性をおぼえておくことが必要だ。日本人の文化は、自分たちの過去さえも切りすてて、現在の一点で一つの傾向にまとまりやすく、これがしばしば、私たちに苦い経験をもたらしている。相撲で言えば、足がそろってしまるところから、倒されやすい姿勢になる。

日本の文化を、ひらく現在形で見ることなく考えてゆくと、トルコの遊牧民と通底する部分も、見出されるかも知れない、そういう努力が必要だ」(四七〇～四七一)。

日本文化を考える上での鋭い、的確な指摘である。鶴見によって述べられたことから明らかのように、このような多面的立体的な視点が問われており、その必要性は、現今の政治情勢ではますます重みを増している。

### (六)

以上鶴見の視点を検討してきた。そしてわれわれは、この視点が近代社会に對する批判として有効なものとなっていることを確認できるであろう。しかしそれはまた、一面的理解によつては、終末論的思想として受け止められる側面を有している。

例えば、プラハの時計台については、次のような記述がある。ここは観光地としても有名であるが、天体運行図、十二ヶ月の暦、時計じかけの人形芝居の組み合わせから成っている。

「一時間ごとに、がいこつが片手でつなをひき、もう一本の手が砂時計をひっくりかえして、鐘をならす。がいこつは、死の使者であり、時間の動きは、私たちが死に近づくことを知らせ、死者の立場から生者の動きを計っている。

(中略)

この人形芝居は、一時間ごとに、五〇〇年、このプラハでくりかえされてきた。プラハの人口が死にたえたとしても、時計の仕掛けがこわれなにかぎり、

芝居はつづくだろう。滅亡にむかって歩む現代文明を、この大時計は、宇宙の規模において、このように計っている」(二八六)。

またインドのベナレスのガンジス河で水浴する人びとの印象には、こう記されている。

「このベナレスという町の歴史は、四〇〇年前までさかのぼることが、できそうだ。

生きていることには意味がないということをとるための道場として、この場所があるように思う。そういうふうにして身につけた無関心をおとって、ふたたび生に眼をむける時に、ここに住む人たちのおだやかなまなざしがあらわれる。それは、各人が自分の国に情熱をもやし、自分のたまたま所属する党派の言語を絶対化しておそうとする闘争場裡にあつて、なんと異質なものだろう」(四八〇)。

これらの言葉の中に終末論的なニュアンスの響きがあることは、否定できない。しかし鶴見の視点そのものが相対的複眼的であることを考えれば、これを一刀両断的に規定してしまうことはできず、現実を行動によって確認していくプラグマティズムの立場からすれば、現実の複雑さをそれなりに反映していると言えるであろう。この意味から、その視点の微妙さを示している鶴見自作の詩二篇を掲げておくことは、説明の手がかりとなるように思われる。

「あつい日、道で

鶴見俊輔

あかんぼうに出会うとき、

頭のうしろに

光の輪が見える

乳母車の中で

動けないまま

世界に対しては

世界にうみだされたことの

苦情をいわず

ただ一心にみている

ここはどこか

何が自分を待っているのか

自分の責任とは何か

——そんなもの、あるわけじゃないか」⑦

もう一篇は、こうである。

「ブーメランのように

鶴見俊輔

ブーメランのように

自分のしたことが

自分にもどってくる

そのとき

ひとつの弧をとおり

風をくぐってきたそれは

すこしやせてひきしまる

新しい旅に出かける

力をもっている

二〇〇六、二、一一 「⑧

これら二篇の詩と前述の視点との間には約二〇年間の開きがあるが、鶴見の思想には、これらを貫く伏流水のような流れが存在する。これは今後更に分析されるべき課題として残される。

### 註

① 「絵葉書の余白に——文化のすきまを旅する」〔鶴見俊輔集——一 外からのまなざし〕（筑摩書房、一九九一年、三四七〜三四八ページ）。以下

本書からの引用はページ数のみを記す。

② 拙著『鶴見俊輔ノススメ』（新泉社、二〇〇五年）第三章を参考のこと。

③ 拙論「鶴見俊輔と周辺からの視点」〔奈良工業高等専門学校研究紀要〕第一四一号、二〇〇六年三月。

④ 鶴見、前出書

⑤ 鶴見は、テレジンに収容された子どもの書いた詩についても、紹介している。そこには子どもの感性で見た収容所が、こう表現されている。

「テレジンはすばらしく美しい。

美しさははつきりと眼に見える。

道を歩く人びとの足音の中にもある。

テレジンのユダヤ人街。

自由のある世界からきりはなされた

この一キロ四方の土地が

そんなふうには見える。

（ミロスラヴ・コセク）（三九三〜三九四）

しかしながら収容所は残酷な現実を子どもたちにも見せていた。次の詩は、他の出典による。

「テレジンで

ここでは なにもかもが おかしい

床に寝なければ いけないし

こんなに黒く くさったジャガイモしか

食べられない

これが ぼくの家だって？

何て きたないんだ

ぼくは だろだらけの床の上に

横になる

なにをするのも よごれてしまう

ここは いつも人でいっぱいだ

ハエも飛びまわっている

ハエが 病気を運んでこないだろうか

ほら 何かがぼくを刺す

シラミだろうか？

テレジンは なんて恐ろしいところだ

いつ ぼくたちは家にもどれるのだろうか

(テディ、本名不詳)

〔『絵画記録テレジン強制収容所——アウシュヴィッツに消えた子どもたち』、(アウシュヴィッツに消えた子らの遺作展)を成功させる会編、ほるぶ出版、一九九一年、二九ページ)。

⑥ これに続けて鶴見は、ヨーロッパ哲学上の巨人に対しても、次のような疑問を呈している。

「いくら完全に覚醒したとしても、ここがどこかどうかを、私たちはどのくらい知ることができるのか？」

哲学史を勉強したヨーロッパ人は、カントとスピノザのちがいをとても大きなものと感じる。しかし、カントもスピノザも、人間の哲学としてとらえる見方もまた、あり得る。若くして死んだスピノザはともかく、カント自身は、老年の日々、ここはどこだ？ という哲学を生きたのではないか(四四七)。

⑦ 『はななみ通信 其の十一通』(はななみ通信局発行、二〇〇四年九月、四四～四五ページ)。

⑧ 『同 其の十六通』(二〇〇六年三月、四〇～四一ページ)。